

追 想

奥 田 喜代子

江古田二丁目

理容業を六〇年もしていたせいでしょうか、足腰が弱くなり、痛む足を引きながら病院に通っております。帰りに通る平和の森公園のベンチに座り、皆さんの楽しい様子を眺めていると、このような平穏な時が流れていることが不思議に思えます。食べたいものが食べられ、欲しい物が手に入り、自由に意見が言えて、何て素晴らしい時代なのでしょう。私の青春時代を顧みると考えられないことです。そして、辛い苦難の時代が甦よみがえって来ます。

私の母は、私が一歳三か月の時に病死したそうです。母が、義母だと知ったのは小学校五年の時でした。担任の先生が私の手を取って、霜しもやけがあまりに酷ひどいので、「もしかしたら貴女のお母さん、本当のお母さんじゃないのかしら」と言われました。その時、やはり本当の母なら、もっと優しくしてくれるのではないかと思いました。小学校を卒業するや母から「奉公に行きな」と言われたのですが、朝、暗いうちに起き、朝食の仕度と掃除をする条件で、やっと実業女学校にやっってもらいました。

十六で卒業し、父の友人の紹介で、小石川の理髪店に奉公に行くことになりました。

修業中の昭和十二年七月、日中戦争が勃発しました。戦争は段々激しくなり、日本の勝利また勝利の報に、提灯や旗の行列に浮かれておりましたが、やがて昭和十六年の夏頃からお客様のところを召集令状が届くようになりました。赤紙が届くと、「おめでとうございます」と言い、それに対して「有りがとうございます」と答えなければ非国民のりと罵られる時代でした。私は奉公して八年目になっていました。その日初めて来店したお客様―ポマードをベッタリつけた若い人でしたが―私の様子を見に来たとは全然知りませんでした。それが見合いで、昭和十六年九月、中野の江古田で理髪店をやっていた主人と結婚しました。その年の十二月、とうとう大東亜戦争（太平洋戦争）に突入したのです。

国民は、軍隊の話や世界情勢の話をお口にすれば「お前は赤だ」と憲兵隊に連行され、拷問にあり、言論の自由など全く考えら

れない時代でした。昭和十七年になると、警戒警報が鳴り始め、戦況が切迫して来たので、横穴式の防空壕を掘り、その中へ避難するようになりました。江古田三丁目の防空壕は東福寺の裏山（戦後三波春夫邸）に造り、道の反対側の小高い山（現在は都営住宅）が三丁目町会の避難場所でした。私の家の防空壕は、水川神社の石垣の所に造り、日用品、衣類、布団、箆^{たんす}など運び入れましたが、湿気がひどく全て使用不能になってしまいました。

空襲は日ごとに激しさを増し、練馬に初めて爆弾が落とされたのは徳田^{とくだ}の農家でした。近所の人達と連れ立って見に行く、大きな漬物石が吹っ飛び、道をふさいでおり、更に爆風で地面に大きな穴が開き、雨がたまってそこに池が出来ていたのを見た時は、皆、あまりの破壊力に立ちすくんでしまいました。下町から比べれば田舎だと思っただけ疎開して来た人が、運悪く石の下敷きになり亡くなったそうです。

私達の最初の子供は死産でした。その悲しみがやっと癒^いえた昭和十八年八月、長男が生まれました。その子が、もう少しで一歳の誕生日を迎える翌年の十九年七月、とうとう主人に日中戦争に続いて二度目の召集令状が来たのです。主人の出身地が岐阜県でしたので、一昼夜かけて岐阜の連隊まで行き、入隊しなければなりません。当時、汽車で十三時間もかかりましたので、親戚や近所に知らせる間もなく入隊し、翌日には外地へ出

征した様子でした。一か月程して、台湾の高雄から子供の好物の金平糖と一緒に便りが届きましたが、その後は、どこか果てに行ったのやら、便りが全く途絶えてしまいました。

主人が出征した後、乳飲み子と主人の遠縁に当たっておじいさん、おばあさんの面倒を見ながら、内弟子の女の子と二人で理髪店を切り盛りしておりました。ますます空襲は激しくなり、爆弾、焼夷弾が落とされるようになり、江古田小学校にも何発か投下されました。

私の家は学校の隣なので、家ごと吹っ飛ばされるようなものすごい地響きでしたが、幸いにも不発弾で助かりました。学校は、敵の標的になるので、東京の学校全部が、学校閉鎖となりました。昭和十九年九月、三年生以上は縁故疎開か学童疎開ということになり、江古田小学校の生徒達は、福島県三春町のお寺と長谷川旅館に別れ、学童疎開しました。お隣のパン屋さんの話によると、お寺や旅館の掃除、農家の手伝い等で勉強どころではなく、食べ物が乏しく、栄養失調になったり、シラミで悩まされ、かゆくて眠れない夜は、東京にいる親が恋しくて、布団の中で皆泣いていたそうです。

町では、その頃から強制疎開が始まりました。道路の入り組んだところの家は、空襲による火災の際消火活動ができにくく、大火になる恐れがあるので、立ち退き命令が出て引越さなければなりません。荷物の疎開もするようになるとの通達で、

店の女の子と親戚の人が、大八車に荷を積んで春日部にあるおばあさんの実家まで一晩中寝ずに運んでくれました。

すでに人々の生活は極端に落ち込み、あらゆる物資が欠乏して配給制になりました。食糧や燃料は配給通帳で受け取り、衣料は衣料切符で受け取るようになりました。老人や子供は、代用食の大豆、とうもろこし、芋、どんぐり粉などは一人前に貰えましたが、お米はほんのわずかで、本当にひもじい思いをしました。遠くの配給所から帰ると、年寄りに「他の家は沢山もらって来るのにお前が愚図だからこれっぽっちの米しかもらって来られない」と怒鳴られました。悔しくて死にたいと思いましたが、主人も遠く戦地で、お国のために戦っているのに私も負けてはいられないと気を取り直しました。在郷軍人や隣組の軍長さんの指導のもと防空ずきを被り、防毒マスクを着けて町内の防空演習に参加しました。近所の農家の方がお店のお客様でしたから、朝五時に起きて髪を刈らしてもらい、芋や野菜や麦などを代金代わりにいただきました。その時ほど、理容師の資格を持ってよかったとしみじみ思ったことはありません。

昭和十九年の暮もおしせまった頃、夫より手紙が届き、無事を喜びましたが、何とフィリピンを経由して北ボルネオに元気で上陸したとの便り。「坊やと年寄りに何か食べさせてやってくれ」と二〇円送ってくれました。兵隊のわずかな手当の中から

送金してくれたことを思うと有り難さに胸が詰まりました。

年明けて、二〇年二月二〇日、東京が何十年振りの大雪に見舞われたその朝、おじいさんが亡くなりました。主人がいなくても不安なのに、お通夜の最中、空襲警報になり真つ暗闇……。本当に心細い思いをしました。翌日の葬式は、腰の高さまでの雪の中、柩ひつぎをリヤカーに乗せ、落合の火葬場までやっとの思いで運びました。棺おけまで不足していたので、遺体を棺おけから出してそのまま火葬にする始末でした。その最中にも空襲に遭い、防空壕に退避しました。

昭和二〇年三月十日、神田から深川、ついには、東京全域で大空襲となり、至る所で多数の死者が出ました。五月には中野が大空襲に見舞われ、沼袋は氷川神社の一角がわずかに残っただけで全焼、新井薬師、片山(松が丘)、野方まで焼け野原となり、江古田も数軒が被災しました。

とにかく、焼夷弾が落ちて来た時の恐ろしさはことばでは言い表せません。落下すると、パーツと一瞬間のように明るくなり、たちまち燃え上がって一面火の海となります。同時にものすごい熱風が沸き起り、身体が吹き飛ばされてしまいます。私は、子供を背負って頭から布団をかぶり、中風のおばあさんにも布団をかぶせ、やかに水を入れて東福寺の裏山へ避難しました。強烈な熱風と火の粉が南風に乗る、沼袋の方面から飛んできました。顔がほてり、髪の毛が焦げるようで、熱さを逃

れるのがやっとでした。沼袋の人達も、そこへ避難して来ました。「私の家、丸焼けになってしまったのよ」と目を真っ赤に泣きはらしていました。

焼け野原になっても米軍機は容赦なく東京の空に飛来し、空一面鉛色に染まる程のB29の編隊が恐ろしい爆音と共に人身を直撃して来ました。哲学堂の近くと、練馬の氷川神社の前に高射砲の陣地がありました。戦争の始めの頃は、砲弾が敵機に命中し、何機も墜落させましたが、昭和二〇年頃には弾薬が底を尽き、陣地も逆に敵機の標的になってしまいました。その当時は家の前にあつた小宮豆腐店さんへある日、大豆を豆腐に加工してもらうために来た、哲学堂陣地の四人の兵隊さんが、艦載機がけたたましい爆音とともに急降下して来ました。バリバリと耳をつんざく激しい機銃の音に、店で働いていた私は、腰が抜けそうに立ちすくんでしまいました。かろうじて子供をかかえ、お客様と一緒に奥の座敷へ駆け込みました。兵隊さんたちも豆腐屋さんへ急いで逃げ込んだので一命を取り止めましたが、江古田四丁目の無線学校と電波兵機の学生さん三人が機銃掃射に当たって亡くなりました。あちこちで機銃掃射があつたので少しの音にも敏感になり、毎日寿命が縮まる思いでした。昭和二〇年八月初旬、広島、長崎に今まで以上の恐ろしい爆弾が落とされ、死人の山だとの背筋の凍る情報を聞かされました。

八月十五日の朝のことです。例の爆弾が東京にも落とされる可能性があるので、警戒警報が鳴ったら防空壕に入り、絶対に顔を出さないで青い光を見るなといわれ、恐ろしくて身を震わせていました。正午にラジオで重大発表があるから必ず聞くようにとの隣組からの連絡がありました。どんな重大放送かと不安な気持ちで、ラジオにかじりついていましたところ、初めて耳にする天皇陛下のお言葉が流れました。「……耐え難きを耐え、忍び難きを忍び……」最初、お言葉が聞きとりにくくて、意味もよく分かりませんでした。もしかすると心の隅に一抹の不安が横切りました。奇しくも不安が的中し、思いもよらぬ終戦の玉音放送でした。日本国民は、必ず勝つと信じていかなる難辛なんじん苦にも耐えて来たのに、今までの苦労も水の泡だったのかと、みんな大声で泣き崩れてしまいました。真夏の太陽が照りつけ、蟬の声が夏の暑さにしみるような日でした。氷川神社の境内に集合との連絡があり、町会長さんより「日本が敗戦したので、米国の兵隊が侵入して来るから、女の人は気を付けないと大変なことになる。夜の外出と戸締りにはくれぐれも注意するように」との話がありました。不安が募りましたが、空襲で夜も眠れない日の連続でしたから、これからは、安心して眠れることが、何よりもうれしく思われました。

しかし、こんなに荒廃した国土が復興出来るのだろうか。そして米軍が入ってくると、日本はどのように占領されるのだろうか。

うか……。戦争が終わっても、先のことを考えると心配は消えませんでした。その上、毎日の食べ物を工面することに追われていましたが、米国の物資が配給されるようになり、ビスケット、コンビーフ、バター等珍しい食糧が多少なりとも出まわるようになると、いつしか人々の心も落ち着いてきました。

外地から兵隊さんも復員して来るようになりましたのに、主人はなかなか帰って来ません。引き揚げ船で帰る人の名を呼ぶラジオの放送に耳を傾け、今日はどうか、明日は帰るかと待ちました。二歳の息子を背負って稲毛の復員引き揚げ事務所に消息を訪ねましたが、「行方不明」との説明で、依然として行方は分かりませんでした。ボルネオのジャングルで敵機の弾丸に当たって死んだのだろうか。マラリアにでもなかって……。いろいろ考えると夜も寝つかれませんでした。

昭和二一年四月初旬から、主人の妹の結婚式のため、岐阜にある夫の実家に身を寄せていました。縁側から外を見てみると、髭面でガリガリにやせた身体に、ポロポロの軍服を着た兵隊が庭に入って来ました。すぐにはだれだか分かりませんでした。義兄が「よう、まあ、無事に帰るとんさったなあ」と声をあげ、主人の母も「よう、帰ってりやあしたなあ、よかった。よかった」と庭でその兵隊と抱き合ったので、夫が帰って来たんだ！生きていたんだ！……と気がつきました。四月十五日のその日は、今でも暎の裏に甦って来る夢のような一日です。復員した

主人は、三日三晩死んだように眠り続け、優しい母と兄の元で三か月程栄養失調の身体を静養させてもらい、その後帰京しました。

お店を主人と私と数人の従業員と、朝早くから、夜遅くまで頑張り、また次男、三男と子供に恵まれ、毎日毎日お店と家事に大変でしたが、充実した日々を過ごしました。

そんな一生懸命に生き抜いた昭和の時代も終わりました。昭和天皇も崩御され、その年の五月に主人も亡くなりました。そして丸四年が経ち、今日は主人の命日に当ります。さまざまな追想が、走馬灯のように次々に浮かびます。そんな日に青春時代を回想することが出来ました。私の青春は、辛い悲しい戦争とともに歩んだ記録と言えるかもしれません。あと二年余りで終戦から五〇年、戦争の爪跡もあと形もなく消滅し、やがては人の心からも消え去るのでしょうか。

平和を願う気持ちから名付けられたのでしょうか、この平和の森公園は、最近まで刑務所でしたが、終戦直後は進駐軍が駐留していました。木炭バスがこの前の道を通ると、MPがバスに乗って来て英語でペラペラまくし立てて恐かったです。今は立派に整備された公園になって、樹々の緑も鮮やかで草花も満開。春の陽が優しい！春の風がさわやか！本当に自然は素晴らしい！そして平和って本当に素晴らしい！

今でも世界のあちこちで悲しい戦争が毎日のように繰り返さ

れていますが、戦争体験者の一人として、悲惨な戦争は、もう二度と繰り返して欲しくないと心から願っております。

